

小学校低学年における基礎・基本の確実な 定着を図る指導（小学校低学年：国語）

第1学年 夏休みに読んだ本をしょうかいしよう『きいてきいて』（東京書籍）

葛城市立新庄小学校 教諭 今池 世起子

Imaike Sekiko

(1) 単元の構想

ア 児童の実態

本学級児童の多くは、入学式の次の日から、元気いっぱいの声が飛び交い、おしゃべりも留まる
ところを知らない。しかし、新しい経験をするたびに不安を感じ、その思いを消え入るような声で
訴えたり、涙ぐんで話せなかったりする児童もいる。また、自分の思いや願いを伝えられずに、腹
痛を訴える児童もいる。そこで、朝読書や国語学習の10分間を使って、紙芝居や絵本の読み聞か
せを行ない、話す、聞くことの楽しさを味わわせるように心がけた。

話すことについては、家庭学習で、詩の音読・暗誦を行なってきた。あわせて、朝の元気調べの
時間を使って、「はい、元気です。」「はい、少し頭が痛いです。」など、声の大きさを意識させな
がら、返答することを毎日欠かさず行なってきた。話すことに慣れてきた6月後半からは、日直児
童2人に、昨日の出来事や発見したことを2、3文でスピーチし、質問をする『日直ニュース』も
行なってきた。その結果、入学当初の不安感が少しずつ解消され、「お話大好き、本大好き・・・」
「日直さん、早く回ってこないかなあ・・・」と、楽しみにするようになってきた。しかし、まだ
何を話したらよいのか、どのように話したらよいのか、と戸惑ってしまう児童がいる。

一方、「聞くこと」については、『よい聞き手は、よい話し手を育てる』という考えから、『聞き
方あいうえお』という表を教室掲示し、相手を見て聞く、いい姿勢で聞く、うなずきながら聞く、
笑顔で聞くなどといったことを常に意識させるようにしてきたが、声かけがないと、いつまでもお
しゃべりをしていたり、姿勢が崩れてしまったりして、最後まで聞くことができない児童もいる。

イ 単元の特性

6月の学習材「きいてきいて」で、学校で経験したことを家族に話したり書いたりして知らせる
る学習を行なったが、その学習をより充実させるものとして本単元を計画した。子どもたちにとっ
て、夏休みは、時間的にも余裕があり、本の好きな子どもたちにとって、楽しい本に出会える機会
でもある。夏休みに読んだ本を友だちに紹介することで、聞いてもらえる喜びが高まり、話す、聞
く、話し合う活動の楽しさを味わうことができると考える。

ウ 指導観

(ア) 内容の系統

学習指導要領「A話すこと・聞くこと」の目標は、以下のようになっている。

- 1・2年… 相手に応じ、経験したことなどについて、事柄の順序を考えながら話すことや
大事なことを落とさないように聞くことができるようにするとともに、話し合お
うとする態度を育てる。

- 3・4年… 相手や目的に応じ、調べた事などについて、筋道を立てて話すことや話の中心に気を付けて聞くことができるようにするとともに、進んで話し合おうとする態度を育てる。
- 5・6年… 目的や意図に応じ、考えた事や伝えたい事などを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる。

また、本単元に至るまでの「話すこと・聞くこと」の学習内容は、以下のとおりである。

- 「うれしいひ」
絵の中から見付けたいろいろな言葉や、絵から想像したことを気軽に話し、話すことに慣れる。(4月)
- 「はなしたいな ききたいな」
自分のことを話しながら、話型を基に話すことに慣れる。(5月)
- 「きいて きいて」
学校で経験したことを友達や家族に話して知らせる。(6月)

(1) 指導の重点

a 夏休みの読書記録を活用する

夏休み前に、学校図書館で2冊の本を借り、また、登校日にはその本を借り替えて、新しい本を読むことを楽しみにしている児童が多い。そこで、夏休みに読んだ本を読書記録カード『こんなほんをよんだよ』に書名、著者名を記録する課題を与えた。また、友達にいちばん紹介したい本の題名を短冊に書き、教室に掲示することにした。そのことにより、「どんなおはなしだろう・・・」「きいてみたいなあ・・・」などと、興味・関心をもって本学習材の学習に取り組むことができると考えた。

b お話メモを活用し、相手に分かるように話す

お話メモに、「書名」「著者名」「おすすめのところ」「おすすめの言葉」などをまとめ、相手に分かるように順序よく話すことができると考えた。

c おすすめカードを書く

自分が紹介したい本について、友達にすすめるカード「おすすめします」を書き、本を見せながら紹介した後、プレゼントし、友達が本を選ぶ時に役立てようと考えた。また、そのカードには、書名、著者名は必ず書かせ、絵や文について児童が書ける範囲で書かせることにした。

d 思いがつながる対話活動を工夫する

対話についての定義は、国語科研究者により様々であるが、この学習では、「思いがつながる対話活動」としたい。下記のような話し手と聞き手の関係が成立した時に生まれると考えられる。

- ・話し手が、聞き手をきちんと意識し、表情を見ながら分かってもらおうとする気持ちをもって話す。聞き手は、話し手の気持ちを感じ取りながら聞く。
- ・聞き手は、詳しく知りたいことや分からないことなどを話し手に聞き返すことで、話し手は、聞き手に分かってもらえるように話を修正する。

この学習での対話は、話し合いが成立する最低人数の二人組で楽しみながら交流し、聞き手が多数になった時の話し合う力につながる活動になると考えた。

e 心に響くチェックカードを工夫する

子どもの主体的・創造的な学習態度を育成するために、振り返りチェックカードを活用することにした。「がくしゅうぜんたいをふりかえろう」は、学習に見通しをもって取り組むことができ、自分の成長をみることができる。

f 日常的な読書活動へとつなげる

友だちの本の紹介を聞いて、読書への意欲が高まり、いろいろな本に興味をもち、進んで読書に親しむようにさせたい。この機会を逃さずに、日常的な読書活動へと結び付けていきたい。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

- 読んだ本の中から紹介したい本を選んで、進んで対話しようとする。
(国語への関心・意欲・態度)
- 読んだ本のおもしろかったところや楽しかったところを選び、順序を考えて話し、大事なことを落とさず聞く。
(話す・聞く能力)
- はっきりした発音で話したり、聞いたりする。
(言語についての知識・理解・技能)

イ 単元の評価規準について

(ア) 単元の評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 言語についての知識・理解・技能
単元評価の規準	・聞き手に分かるように紹介しようとしている。 ・興味をもって、友だちの話の話を聞こうとしている。	・伝えたいことを相手に分かるように順序を考えて話している。 ・友達の話の大事なことを落とさずに聞いている。	・相手の目を見て、はっきり話している。 ・丁寧な言葉遣いで、話し合っている。
具学 体習 の 評お 価け 規 準	①夏休みに読んだ本の中から、紹介したい本を選び、おもしろかったところを進んで話そうとしている。 ②大事なことを聞き落とさないように興味をもって聞こうとしている。	①夏休みに読んだ本のおもしろかったところを相手に分かるように順序よく話している。 ②友達の話を最後まで聞き、分からないことを聞き直している。	①背筋をのばし、姿勢や口形などに注意して話している。 ②ていねいな言葉遣いで尋ねたり、応答したりしている。

(イ) 観点別評価の進め方

	学習活動における 具体の評価規準	A 「十分に満足できる」と判断される視点と具体的な姿の例 C 「努力を要する」と判断された児童に対する手だて
国 意語 欲へ	アー①夏休みに読んだ本の中から、紹介したい本を選び、おもしろかったところを進	A 友達に紹介したい本の紹介カードを作り、おもしろかったところを意欲的に話している。 C 読書記録カードを見て本選びをし、紹介カードの書き方を

・の 態関 度心 ・	んで話そうとしている。	個別に助言する。
・ 聞	アー②大事なことを聞き落とさないように興味をもって聞こうとしている。	A 本のおもしろかったところについて大事なことを落とさずに興味をもって聞いている。 C 机間指導をして、友達の方を見て、聞くように助言する。
話 す ・ 聞	イー①夏休みに読んだ本のおもしろかったところを相手に分かるように順序よく話している。	A 観点に沿って、順序を意識して紹介したいことを「お話メモ」にまとめ、聞き手に分かるように話している。 C 「お話メモ」の例を参考に共に考え、メモを見て話すように助言する。
く 力	イー②友達の話を最後まで聞き、分からなかったことを聞き直している。	A 友達の話に相づちをうったり、うなずいたりしながら聞き、分からないところを尋ねている。 C 「聞き方あいうえお」の表を思い出させる。
知言 識語 ・に	ウー①背すじを伸ばし、姿勢や口形に注意して話している。	A 友達の目を見て、口を大きく開けて、落ち着いて話している。 C 姿勢や口形を個別に声かけをする。
理つ 解い ・て 技の 能	ウー②ていねいな言葉遣いで尋ねたり、応答したりしている。	A 話題に沿って、「～ですか?」「～です。」とていねいな言葉遣いで質疑応答している。 C 今までの学習を思い出させ、掲示物（話し方・聞き方表）を見るように助言する。

(3) 指導と評価の計画（6時間）

次	時間	○ねらい ●学習活動	評価規準と評価方法
一	1	○学習のめあてを知り、学習の見通しをもつことができる。 ●好きな本を友達に紹介することを知る。 ●紹介したい本の題名を短冊に書く。 ●今日の学習をふりかえる。	アー①（書名を書いた短冊・チェックカード）
二	2	○紹介したいことをお話メモにまとめることができる。 ●紹介したいことの順序を考え、お話メモにまとめる。 ●今日の学習をふりかえる。	アー①（お話メモ・チェックカード）
	3	○お話メモをもとにお話原稿をまとめることができる。 ●お話原稿を書く。 ●おすすめカードを書く。 ●今日の学習をふりかえる。	アー①（お話原稿・チェックカード）
	4	○本の紹介の練習をすることができる。 ●教員の本の紹介を聞き、話し方や質問の仕方を理	アー②（聞く様子を観察）

		解する。 ●本の紹介の練習をする。 ●今日の学習をふりかえる。	イー①（練習の様子を観察・チェックカード）
三	5 本 時	○好きな本の紹介をすることができる。 ●本を見せながら、二人一組で紹介し合う。 ●2組を抽出して、全員の前で本を見せながら紹介する。 ●相手を替えて、紹介し合う。 ●今日の学習をふりかえる。	イー①②（録画・録音・チェックカード） ウー①②（録画・録音・チェックカード）
四	6	○学習のまとめをすることができる。 ●ビデオを見て、工夫すべきことを話し合う。 ●相手によく分かる話し方・聞き方について話し合う。 ●本の紹介をして、できるようになったことをまとめる。	ウー①②（チェックカード）

(4) 評価を生かした個に応じた指導

ア 展開例（第5時）

(ア) 目標

- 夏休みに読んだ本のおもしろかったところを紹介して、交流することができる。

(イ) 展開

学 習 活 動	指導上の留意点	つまずきへの手だて
1 本時のめあてを確認する。		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> なつやすみによんだほんをしょうかいしよう。 </div>		
2 二人一組で紹介し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○話し方と聞き方の確認をさせる。 ○本を見せながら、紹介させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「お話メモ」を机上に出させておく。 ・話すことが苦手な児童を把握しておき、個別に指導・助言する。
3 二組を抽出して全員の前で紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ○フロアーから、よかったところを発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し方、聞き方の観点項目を思い出させる。
4 相手を替えて紹介し合う。		
5 今日の学習をふりかえる。		

イ 考察

a 夏休みの読書記録を活用する

時間的に余裕のある夏休みに、たくさんの本に出会わせたいと思い、読んだ本について記録する

『こんな本を読んだよ』という課題を与えた。その読書記録が、紹介したい本を選ぶ時に役立った。また、その本の題名と作者名をカードに書き、教室に掲示した。子どもたちは、「わたしと同じ本だ」「作者が同じだ、どんなお話なんだろう」と学習の感想を言い合い、学習意欲の向上につながった。

(図1・2)

読んだ日	読んだ本	感想
1	アサギのてんとう虫	おおきとらあ
2	わたしのたまご	ふしもととまご
3	わたしのたのしみ	あせとまご
4	くらげのおひら	まごのうさぎ
5	もくねいよじさん	たはせ/イソウ
6	おかしなおかしな	たなつよいき
7	さいちいこもろ	おあただけが
8	くわんせいのあひら	あまのりんご
9	青春でんぱ	みまもとたは
10	おいてはほくのう	あいままごと



図1 夏休みの読書記録

図2 教室掲示のカード

b お話メモを活用し、相手に分かるように話す

どんなことをどんな順序で紹介するかを考えるための『お話メモ』(図3)を用意し、「本の題名」「作者名」、「登場人物」、「おもしろかったところ」、「おすすめのことば」に沿って内容をまとめさせた。そのメモを元に、聞き手によく分かるように、『お話原稿』(図4)を考えさせた。その際、子どもたちから、「おもしろかったところの絵を見せながら紹介したい」、「友だちの前でおもしろかったところの文を読んでみたい」という声上がり、友達にも紹介する本を好きになってもらいたいという思いをもって話すことができた。

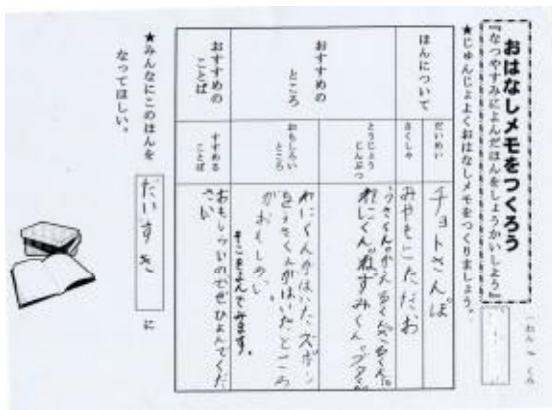


図3 お話メモ

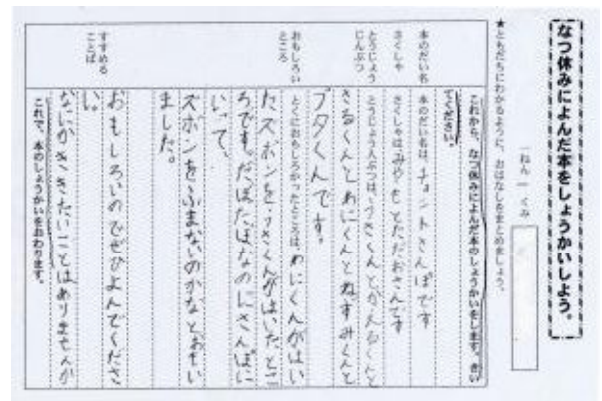


図4 お話原稿

c おすすめカード

朝読書の時間を使って、友達に本を紹介した後にプレゼントする『おすすめカード』を4枚作った。友達がすすめる本を探す時に大変役立ち、楽しく、意欲的に本探しをする様子が見られた(図5)。

d 思いがつながる対話活動の工夫

二人一組の相互交流学習を行なう前に、教師の紹介スピーチを聴き、子どもたちから質問をさせるようにした。そのことにより、話し方や質問の仕方を理解し、二人で話す活動へとつなげるこ

ができた。また、友だちの話を「よかったね。」「読んでみたいなあ。」などといった思いをもちながら聴くことができた。さらには、「二人だったら、はなしやすいな。」「もっと、はなしたいな。」と、意欲的な様子が見られた(図6)。

《二人組の交流例》

話し手「これから、なつ休みによんだ本をしょうかいします。きいてください。

本のだい名は、ペコペコライオンです。

さくしゃは、きむらよしおさんです。

とうじょう人ぶつは、ライオンとラクダです。ライオンとラクダの名まえはわかりません。

とくに、おもしろかったところは、ライオンとラクダが目をまわし、足がクラゲみたいになったところと、しんぞうがばくはつしそうなところですよ。

そこをよんでみます。(本文の一部を朗読する)

ぼくのすきな本です。どうぞ、よんでください。

なにか、ききたいことはありませんか。」

聞き手「なぜ、ライオンは、はらぺこなのですか。」

話し手「あさから、なにもたべていないのです。たべるものがないのです。」

聞き手「ほかに、どうぶつは出てきますか。」

話し手「出てきません。」

聞き手「さいごは、どうなりますか」

話し手「さいごは、どうなるかはよんでみてください。」

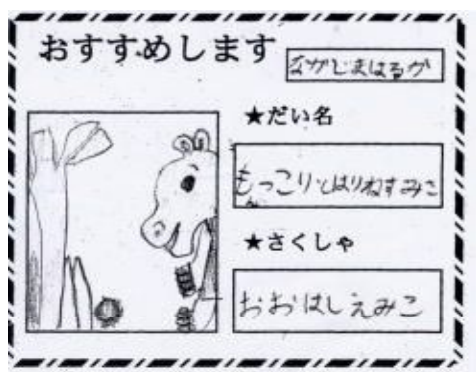


図5 おすすめカード



図6 二人組での交流風景

e 心に響くチェックカードの工夫

主体的・創造的な学習態度を育成するために、学習目標と自己評価を合わせたチェックカードを活用することにした。目標と評価を一体化したカードを工夫することで、子ども自身が、自分のがんばり具合がよく分かり、次の学習への見通しや意欲をもつことができた(図7)。

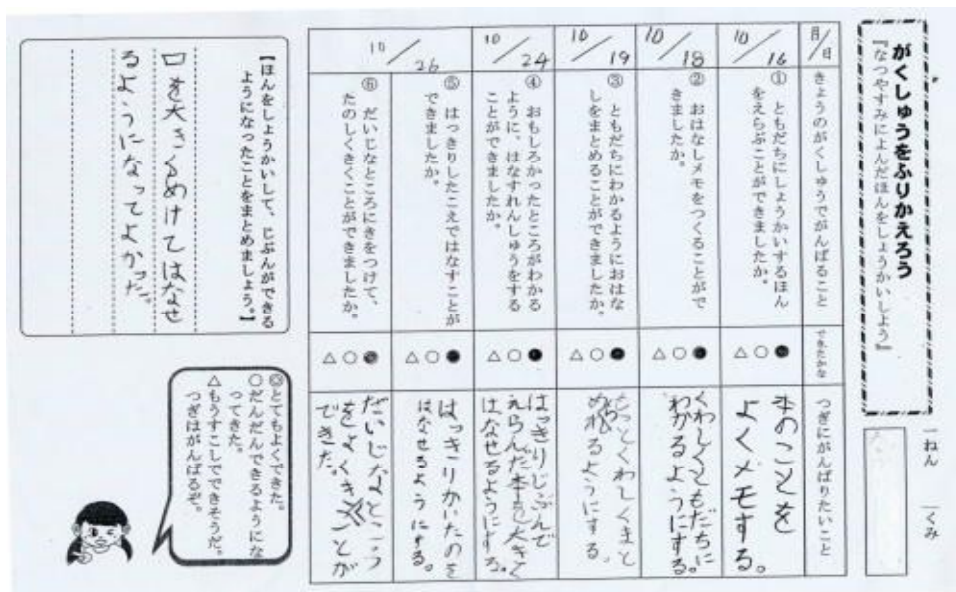


図7 チェックカード

f 日常的な読書活動へとつなげる

本が大好きな子どもたちだが、この学習を通して、より一層本が大好きになった様子で、休憩時間にも、本の主人公の話をしたり、おもしろかったところを話したりしている様子がみられた。

また、「次は〇〇ちゃんの本を読みたいから、貸してね。」「その本、図書室にもあったから借りてくるね。」と、日常的な読書活動へとつなぐことができた。これをきっかけに、子どもの実態に合った読書カードを用意しておき、記録として残すということも行なった(図8)。

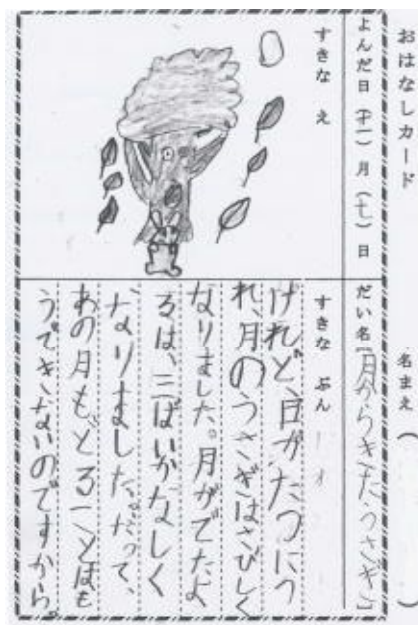


図8 読書カード

(まとめ)

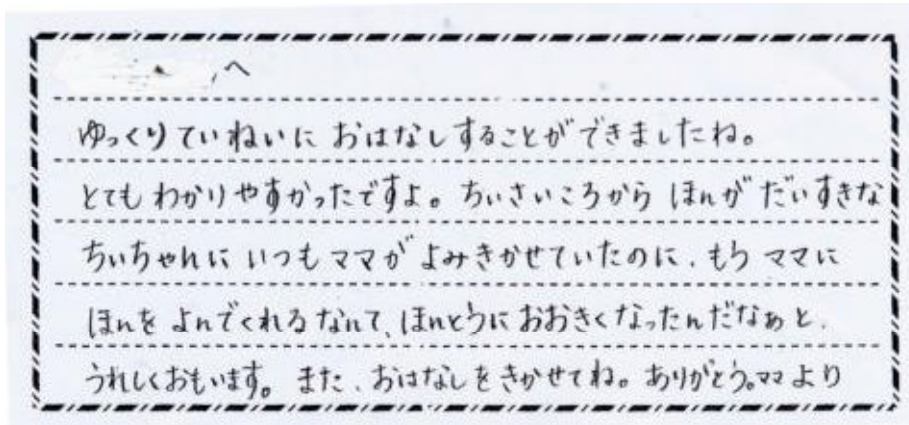
- ① お話が大好きな本校の1年生は、昨日の出来事を話したり聞いたりすることに興味や関心をもっている。この特性を生かした新しい経験を与えることで意欲的に言語活動に取り組むことができる。この時期を捉えて、いろいろな経験をさせ、「事柄の順序を考えながら話す」ことや、「大事なことを落とさないで聞く」能力を育成したい。
- ② 低学年においては、話したり聞いたりする言語活動が楽しくできる基盤をつくることが大切である。それは、生活の中で生じた話題について、身近な相手と話し合うことによって培われるものとする。指導者が話し合う材料となるいろいろな経験ができるよう工夫することが重要である。

(5) 成果と課題

a 成果

① 本校では、読書活動の活性化を目指した「読むこと」領域の取組を行なっている。そこで、本年度は、「話すこと・聞くこと」の領域でも、子どもの読書を広げる取組を計画した。

授業を進めるにあたり、1年生の子どもだけで、紹介したい本を選ぶことができるのだろうか、と不安を感じ、学級通信で今回の学習の主旨を保護者に知らせ、協力をお願いした。また、授業を進めていくうちに、子どもから、「お家の人にも聞いてもらいたいな・・・。」という声上がり、保護者に本を紹介することにした。そして、保護者の方から、子どもたちに感想をお願いした。保護者からの感想を読んだ子どもたちは、「いそがしいのに書いてくれたんだ。」「お母さんに本をおしえてあげてよかった。」などと、うれしそうな様子が見られた。子どもたちは、保護者との交流を通して、より一層学習への達成感もつことができたと考える。低学年の指導においては、家庭との連携が欠かせないものであるということが分かった。



《保護者からの感想の一例》

② 本年度は、よりよく聞き手に分かりやすく伝えるために、話す順序を示したワークシートを用意した。そのことにより、話すことに苦手な思いをもっていた子どもたちにとって、楽しい学習活動となった。このような入門期の授業においては、例年同じような指導をしていたのでは、子どもたちの基礎・基本の力を育成することはできない。子どもたちの実態に応じて、指導方法や内容を考えていくことが重要である。

③ 自分が紹介したいと思う本との出会いがなければ、本活動は成立しない。「おもしろいなあ、たのしいなあ、かなしいなあ・・・。」と本に対する感想をもたなくては、紹介したいという意欲はうまれにくい。紹介したいという強い思いがあれば、その思いを聞き手に伝えたいという願いが高まり、「話す」ことの基礎・基本である「大きな声ではっきり話す」ことを実践できる基盤が生まれる。そのためには、日頃から多くの本に接し、読んでいること、読書の楽しさを味わえていることが大切である。読み聞かせやブックトークなど、楽しい読書活動を継続して行ない、子どもたちが本に出会う機会をより多く、設定することが大切である。

b 課題

① 学習への見通しをもって主体的に学ばせたいと考え、学習計画と自己評価を合わせた「振り返

りチェックカード」を活用したが、少々書きづらいところがあった。やはり、発達段階に応じてワークシートを詳細に検討すべきであると感じた。

- ② 今回の学習を通して、話すことに苦手意識をもっている子に、大きな声ではっきりと話す力が付いてきたように感じられる。しかし、一部の子どもの苦手意識を払拭することができなかった。学習時にはできていても、日常会話の中で使えないことがある。口形や発音に注意しなくても会話が成り立つからである。よく分かるように話せているだろうかといった問いかけから、口形、発音に目を向けさせ、苦手な子への支援につなげたい。

《参考文献》

- ・ 小学校学習指導要領解説 国語編 文部科学省
- ・ 国語学力を測る「到達度」チェックカード話すこと・聞くこと 瀬川栄志 明治図書

(1) 単元の構想

ア 児童の実態

本学年の児童は、第1・2学年での学習を通して、経験した事などについて、相手に応じて事柄の順序を考えながら話すことや、大事なことを落とさないように聞くことができるようになってきた。話し合う態度も育ちつつあるが、相互交流を深めるには至っていない。

第3学年になり、クラス替えによって児童の顔ぶれは変わったが、低学年で取り組んできた成果が実り、聞くことについては、指導者の合図で話し手の話を聞く準備をしたり、話を聞いたりする習慣が、ほぼ身に付いてきた。話すことについては、事前に発表する内容や台詞を用意して練習を重ねておくと、自信のある大きな声でいきいきと発表することができる児童が増えてきた。

そこで、朝の会で日直がスピーチをする『昨日のこと紹介』では、質問コーナーの時間を設けて、話し手と聞き手が交流できるようにした。また2学期からは、学級活動や道徳の時間も活用し、楽しみながら相互交流活動に慣れるようにした。例えば、学級活動では、話型をもとに話し合った。

道徳の時間には、ていねいな言葉遣いで話す大切さが気付くよう指導した。回数を重ねるに従って自分たちの思いを伝え合えるようになりつつあるが、まだ相手に対して意識をもって話し合う力が十分に育っているとはいえない。

イ 単元の特性

本単元は、耳をすまして聞いた雨の音をもとにクラスの詩を作る学習活動を通して、進んで話し合おうとする態度を身に付けさせることをねらいとしている。

これまで児童は、音に関係する詩など、いろいろな詩を鑑賞してきた。また、自分の名前を使って詩を作ったり、詩から想像したことを絵にするなどの学習活動を通して、詩に親しみ、詩の学習を「おもしろいな」「またしたいな」と感じる児童が増えてきつつある。

これらのことから、ふだんから親しんでいる『詩』を題材に話し合い活動を行うことで、話し合いへの苦手意識や抵抗感をやわらげ、進んで楽しく活動に参加することができるのではないかと考えた。

また、秋の長雨が続く時期なので、耳をすまして聞く題材としてふさわしく、楽しみながら想像をふくらませ、様々な言葉を見つけ、話し合い活動が活性化するのではないかと考えた。

ウ 指導観

(7) 内容の系統

学習指導要領「A 話すこと・聞くこと」の目標は、以下のようになっている。

- 1・2年… 相手に応じ、経験した事などについて、事柄の順序を考えながら話すことや大事な事を落とさないように聞くことができるようにするとともに、話し合おうとする態度を育てる。
- 3・4年… 相手や目的に応じ、調べたことなどについて、筋道を立てて話すことや話の中心に気を付けて聞くことができるようにするとともに、進んで話し合おうとする態度を育てる。

- 5・6年… 目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどを的確に話すことや相手の意図をつかみながら聞くことができるようにするとともに、計画的に話し合おうとする態度を育てる。

本単元に至るまでの「話すこと・聞くこと」の学習内容は、以下のとおりである。

<第2学年>

- 1学期 ○ やってごらん おもしろいよ (学校図書)
 - ・ 一年生にとんとんずもうの遊び方をわかりやすく話す。
- 2学期 ○ たからさがしにちょうせん！パート1 (学校図書) パート2 (地域の地図を活用)
 - ・ 話す順序を考えながら道案内をする。大事なことを落とさず最後まで聞く。
- 3学期 ○ 聞いて聞いて！小さかった頃のこと (国語科・生活科)
 - ・ 事柄の順序を考えながら進んで話し、大事なことを落とさないように聞く。

<第3学年>

- 1学期 ○ 耳をすまして音集め
 - ・ 集中して雨の音を聞き、聞いた音を紹介しあう。話の中心に気を付けて聞く。
- 2学期 ○ 分類ということ (光村図書)
 - ・ 筋道を立てて話す。自分との相違点や共通点を考えながら聞く。

(4) 指導の重点

a 1学期の学習をいかす

1学期から2学期にかけて『耳をすまして音集め』カードに、聞いた音を記録する学習活動を続けている。この活動は、集中して話をしっかり聞き、進んで話し合いに参加できる力を身に付けさせることを意図している。本単元は、聞こえる音の中から雨の音だけを聞き取るという学習活動である。児童は、音集めの楽しさを知っているため、意欲をもって音を聞き分ける活動を行い、詩作りに役立てることができると考えた。

b 取材メモ(雨あめカード)を活用する

詩を作るためには、たくさんの言葉が必要である。想像力豊かな3年生の特性を生かして、聞こえた音や、想像した雨の言葉とその言葉への返事を雨あめカードに記入しておくことで、話し合い活動に苦手意識をもつ児童でも意欲的に参加できると考えた。

c 話型を提示し、話し合う意欲を高める

「言いたいことはあるけれど、どう言ってもいいかわからない。」児童が時折言う言葉である。そこで、話し合う意欲を高めるために、発表の時に使ういくつかの話型を掲示物として例示しておき、それに沿って話し合いができるように工夫した。

d 小グループから始める話し合い活動を取り入れる

話し合い活動に積極的に参加できない児童にとって、クラス全体での話し合いはまだ不安が多い。それに比べて小グループでは、楽な気持ちで参加でき、話しやすいため、一人ひとりの意見を引き出しやすい。小グループでの話し合いに慣れることで、その後の全体での話し合いがより活発になると考えた。

e よくわかるふりかえりカードを工夫する

学習全体をふり返ることができるカードを作ることで、学習に見通しを持って取り組んだり、自分の成長を見やすくしたり、今後の課題を児童が主体的に考えることができるようにした。

f 読む・書く活動へつなぐ

クラスの詩を作る活動を通して、詩を読む楽しさや詩を作るおもしろさなど、読むこと・書くことへの興味関心が高まるだろう。この機会を生かして、詩にとどまらず、さまざまなジャンルの本を読んだり、文章を書いたりする学習意欲の向上を図る。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

- 耳をすまして自然や友だちと楽しく対話する。(国語への関心・意欲・態度)
- 互いの意見の相違点や共通点を考えながら、進んで話し合う。(話す・聞く)
- 相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話す。(言語についての知識・理解・技能)

イ 単元の評価規準について

(7) 単元の評価規準

	ア 国語への 関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 言語についての 知識・理解・技能
単 元 の 評 価 規 準	・話し合い活動に興味をもって、自ら積極的に話し合いに参加しようとしている。	・互いの意見の相違点や共通点を考えながら、話し合っている。	・その場の状況や目的に応じて適切な音量や速さで話している。 ・丁寧な言葉遣いで、話し合っている。
学 具 習 体 活 動 の 動 評 に お お 規 規 準 る	①詩をよりよいものにしようと、進んで話し合おうとしている。	①雨の音や雨から想像した言葉について、自分との相違点や共通点を考えながら、話し合っている。	①その場の状況や目的に応じて、聞き手が聞き取りやすい音量や速さで話している。 ②友達の気持ちを考えながら、丁寧な言葉遣いで話している。

(1) 観点別評価の進め方

	学習活動における 具体の評価規準	A 「十分満足できる」と判断される視点と具体的な姿の例 C 「努力を要する」と判断された児童に対する手だて
国 意 語 欲 へ の 態 関 度 心	アー①進んで話し合おうとしている。	A 雨の音や雨の気持ちについて、自分の考えをまとめて、話し合おうとしている。 C 『雨あめカード』に書いた言葉の中から詩に使いたい言葉を考え出すことで、話し合いに参加しやすくなるように支援する。

話 す 聞 く 力	イー①雨の音や雨から想像した言葉について、自分との相違点や共通点を考えながら、話し合っている。	A 自分の考えと比べながら話し合っている。 C 『雨あめカード』に記入した言葉を見ながら、話したり聞いたりするように助言する。
知 識 に 理 つ 解 い て 技 の 能	ウー①その場の状況や目的に応じて、聞き手が聞き取りやすい音量や速さで話している。 ウー②友達の気持ちを考えながら、丁寧な言葉遣いで話している。	A 友達の目を見ながら、その場の状況に応じた声の大きさを、ゆっくりはっきり話している。 C 個別指導を行いながら、その都度助言する。 A 聞き手の気持ちを考えながら、丁寧な言葉遣いで話している。 C その場の状況に応じた言葉遣いを考えさせる。

(3) 指導と評価の計画 (6時間)

次 時 間	○ねらい ●学習活動	評価規準と評価方法
一 1	○学習のめあてを知り、学習の見通しをもつことができる。 ●雨の日にベランダや運動場などで雨の音を聞いて、擬音語で表す。 ●雨の音から想像できる言葉を書く。	雨あめカード アー①
二 2 3	○雨の音から想像した言葉の中から伝えたい事柄を選んで、伝え合うことができる。 ●伝えたい事柄を選び、メモを参考にしながらていねいな言葉遣いで話す。 ●相違点や共通点を考えながら聞く。	アー① ウー② 伝え合う様子を観察 (取材メモ・ふりかえりカード)
三 本 時 4	○雨の音の詩を話し合いながら作ることができる。 ●小グループで話し合い、割り当てられた部分の詩を作る。 ●小グループで話し合った内容を学級全体に伝える。 ●学級全体で話し合い、詩を完成する。	アー① イー① ウー① 話し合いの様子を観察 (ふりかえりカード)
四 5	○学習を振り返り、学習のまとめをすることができる。 ●ビデオを見て工夫すべき所をメモし、話し合う。 ●話し合いをして大変だったことや、うまくいったことなどについて確認する。	イー①メモカード話す 様子を観察
五 6	○他のクラスの人に、作った詩を紹介し合うことができる。 ●詩を読む練習をする。 ●作った詩を群読し合ったり、詩を作る過程を紹介することができる。	ウー①② (紹介の様子 を観察)

(4) 評価を生かした個に応じた指導

ア 展開例 (第4時)

(7) 目標

互いの意見の相違点や共通点を考えながら、進んで話し合うことができる。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	つまづきへの手だて
1 本時のめあてを確認する。		
雨の音の詩を作るために、進んで話し合おう！		
2 小グループごとに詩の一部分を完成させる。	○掲示物に基づいて、話型や話合いの仕方を確認させる。	・詩作りや話し合いが苦手な児童を把握しておき、個別に指導・助言する
3 小グループで話し合った内容をクラス全体に発表する。	○聞き手が聞き取りやすい音量や速さで話すように意識させる。	
4 詩を見ながらクラス全体で話し合いよりよい詩を完成させる。	○よりよい詩にするために、グループで作った詩のよいところや、もう少し考え直すとよいところを見つけさせる。	
5 話し合いについて振り返り、気づいたことや思ったことについて交流する。	○振り返りカードをもとにして、本時の感想を発表させる。	

イ 考察

a 1学期の学習をいかす

1学期には、耳をすましてよりたくさんの音を聞き取る活動を行った。2学期には、聞こえる音の中から対象となる音を選んで聞き取る（教室の中の音・外から聞こえる音など）活動を行った。どちらも競うようにして意欲的に活動していた。そのため、音集めの活動を本単元の導入として行ったことで「今度はどんな楽しい勉強をするのだろう」と興味をもって意欲的に学習に取り組んでいた。年間指導計画にもとづいた系統的な指導が大切だと感じた。(図1)

b 取材メモ(雨あめカード)を活用する

取材メモ(雨あめカード)は、話合いの題材となるものであり、詩を作りやすくするための手立てとなるものである。第二次の学習では、取材メモに記入した内容の中から、特に友達に紹介したい雨の音や想像した言葉を選んで伝え合う活動を行った。児童が特に紹介したい音や言葉を選ぶ活動は、なぜその音や言葉を気に入ったのかを自分自身で考えることにつながった。理由を明確にし

ながら自分の思いを友だちと伝え合うことで、話し合いの内容が深まった。(図2)

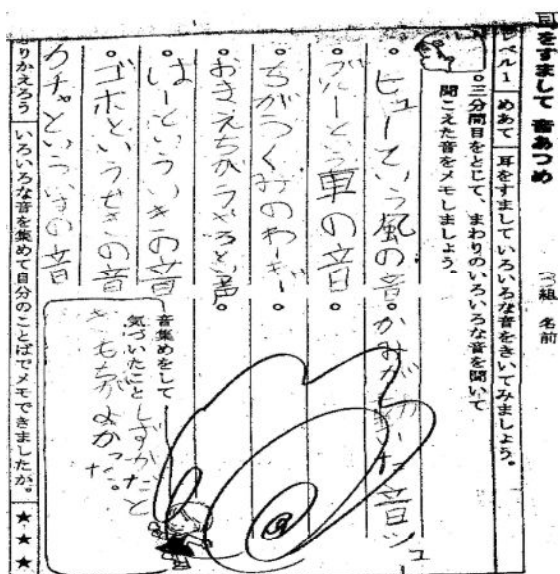


図1 1学期の学習「耳をすまして音集め」

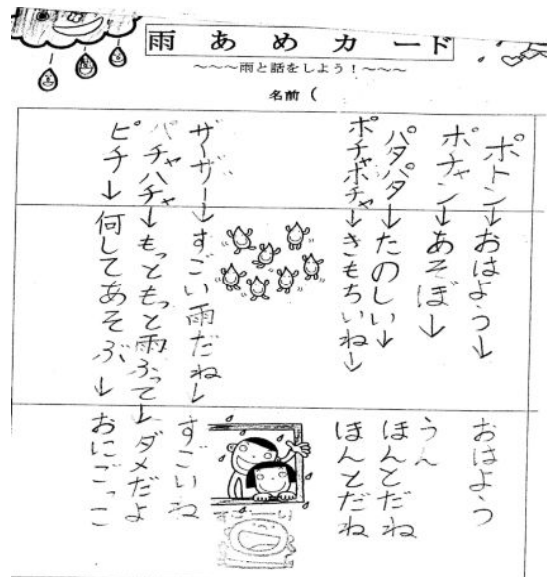


図2 取材メモ (雨あめカード)

c. 話型を提示し、話し合う意欲を高める

『発表や話し合いの仕方』の話型を教室に掲示した。話し合いが苦手な児童にとっては、安心して話し合いに参加できる手立てとなった。また、『話し合いの進め方』(主に司会者用)の話型プリントを用意し、事前に話し合いの流れを把握させたことで、司会の役割を知り、司会の指示に従って適切に話し合いを進めることができた。また、友達の話を書く時には相違点や共通点を意識しながら聞き、話す順番が回ってくるまで待つという、話し合いのルールにもとづいたスムーズな話し合いができた。(図3・図4)

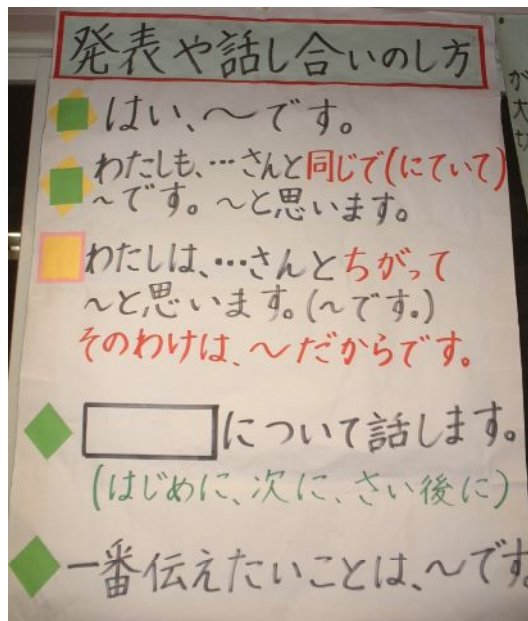


図3 話型

- 話し合いの進め方
- 名前()
- は、し会者 ● は、し合でないさんか者
 - これから [] を始めます。
 - まず、自分の意見を整理してください。
 - それでは [] についての話し合いをします。
 - □さんから順番に意見を言ってもらいます。□さん、おねがいします。
 - ありがとうございます。今の□さんの意見を聞いて、しつ間はありますか。
 - □さん、どうぞ。
 - わたしは、□さんの話を [] と思いました。
 - [] について、もう少し詳しく話してください。
 - どうしてですか。
 - [] が、ですか。
 - ほかにしつ間はありますか。では、次に○さん、おねがいします。
 - たくさ意見が出ましたので、これから○チームの意見をまとめたいと思います。
 - これまのみんなの話を聞いて、どれがいいと思いますか。わけも言ってください。
 - わたしは [] がいいと思います。わけは [] からです。
 - ほかの人はどう思いますか。
 - わたしは、 [] がいいと思います。わけは、 [] だからです。
 - 今の話し合いで、くの人が多いので、くを決めたいと思います。
 - これで話し合いを終わります。



図4 話し合いの進め方 話型プリント

図5 話し合いの様子

d 小グループから始める話し合い活動

本学年の児童は低学年の時に、学習の様々な場面で1対1で話合う活動を行ってきている。本時では、大勢の前で自分の意見を言いにくい児童も、4・5人の少人数の中では話し合いに参加することができていた。そのため、活動意欲が高まり、全体の話し合いでも、よりよい詩を作ろうと意欲的に考える姿が多く見られた。第3学年は、よく話す子とあまり話さない子の差が明確になる時期である。低学年の時に1対1で話合う経験を積み重ねていたことで、今回のような4・5人の小グループでの話し合いが可能になったと考えている。こういった経験の積み重ねが、高学年での集会活動やディベート活動などに役立つであろうと考えている。(図5)

<小グループによる話し合いの活動例>

- 司会者：詩について話し合いをします。まず、自分の意見を整理してください。それでは、順番に意見を言ってください。自分から言います。ぼくは、「楽しいね」「そうだね、たのしいね」がいいと思います。次に、Aさんお願いします。
- A：私は「楽しいねったら楽しいね」がいいと思います。それは、みんなが楽しくなるからです。
- 司会者：ありがとうございます。何で楽しくなるんですか？
- A：リズムがいいからです。
- 司会者：ありがとうございます。ほかに質問はありませんか。では、B君お願いします。
- B：「いたいけど、がんばれー」がいいと思います。それは、雨が痛そうにがんばっているからです。
- 司会者：ありがとうございます。聞こえにくいところがあったので、2の声（グループの人みんなに聞こえる声の大きさ）でもう一度言ってください。(図6声のものさし)
- B：2の声でもう一度言う。
- 司会者：質問はありませんか。では、Cさんお願いします。



図6 声のものさし

C : 私は、「もっとおしゃべりしようよ」がいいと思います。

司会者：「たくさん意見が出ましたので、これからCの後ろチームの意見をまとめたいと思います。

B : ぼくは、Cさんのがいいです。それは、リズムにのって楽しそうだからです。

司会者：ぼくは、自分のがいいと思います。それは、リズムよく楽しそうに言えるからです。

A : リズムに合わせた方がいいです。

先生 : どう？話し合い進んでる？

司会者：B君は、Cさんのがよくて、ぼくは、自分のがよくて、Aさんは、リズムに合わせた方がいいって言ってるねん。

先生 : なるほど。リズムに合わせて読みやすくするのは大事やね。意見が分かれるんやったら、グループの詩を組み合わせ、リズムよく読めるようにしたら？

4人 : ああ、そうか。

司会者：「楽しいねったら楽しいね。もっとおしゃべりしようよ」とくっつけたらいいと思います。

C : それがいいと思います。

A : リズムを合わせないと。「楽しいねったら楽しいね。もっとおしゃべりしましょうよ。」はどう？

B : それがいい。

司会者：今の話し合いで「楽しいねったら楽しいね。もっとおしゃべりしましょうよ。」の人が多いいので、これに決めます。

e よくわかる！ふり返りカードの工夫

単元全体の学習活動が一目でわかるようにしたので、「先生、今度どんなことするの？」と口々にたずねることなく、見通しをもって学習に取り組むことができた。また、「次（の学習）の時には、はっきりと友だちに聞こえるように話します。」などと児童自ら課題を見付け、意欲をもって次の学習に取り組むことができた。また、最後に担任から一言メッセージを書いてもらうことで、より達成感を味わい、今後の学習意欲も高めることにもつながった。（図7）

ふりがえりカード
三年三組オリジナル 雨の音の詩を作ろう！ 名前

11月24日(金)	11月6日(月)	10月30日(日)	10月23日(月)	10月5日(木)
<p>① はきりした靴で、ほかのクラスの人がスリの靴をよいかいするところを見たか。</p>	<p>② 夜に静かになる時に「たじろ」を覚えているか。</p>	<p>③ 連んで静かにきんかしてましたか。</p>	<p>④ 雨の音をささやかせたとき、いろいろな音や声に耳をこらせたか。</p>	<p>⑤ 雨の音をささやかせたとき、いろいろな音や声に耳をこらせたか。</p>
<p>△ ○ ◎</p>	<p>△ ○ ◎</p>	<p>△ ○ ◎</p>	<p>△ ○ ◎</p>	<p>△ ○ ◎</p>
<p>① わたしは⑤の所をかんばりたいです。そのかんばりたいのは、次はぼうずが人のまねをしたいです。の所を次にはぼうずはエふうをしますと書きたいです。かんばりたいです。</p>	<p>② かんばりたいです。そのかんばりたいのは、次はぼうずが人のまねをしたいです。の所を次にはぼうずはエふうをしますと書きたいです。かんばりたいです。</p>	<p>③ 今日はいつより決めるのが早くて、さきりしました。うれしかったです。</p>	<p>④ 雨は何と言っているか、その所かむすかしかったです。そのかんばりたいのは、次はぼうずが人のまねをしたいです。の所を次にはぼうずはエふうをしますと書きたいです。かんばりたいです。</p>	<p>⑤ 雨は何と言っているか、その所かむすかしかったです。そのかんばりたいのは、次はぼうずが人のまねをしたいです。の所を次にはぼうずはエふうをしますと書きたいです。かんばりたいです。</p>

先生からの⑤の学習でもめてを守りながら楽しく活動していましたね。これからもどんな人強でも守り命して、うね、よまかんばりました。

△ ○ ◎

◎ともくもまた、○たいいでま、△次はぼうずが




図7 ふり返りカード

f 読む・書く活動へとつなぐ

この学習を通して、詩に興味をもった子どもたちは、自主学习ノートや自分の大切な紙に詩を書いて見せ合ったり、いっしょに詩を作っては「先生、見て見て。」と持ってきてたりするようになった。また、家庭で気に入った詩集を買ってもらい、朝の読書タイムに読む児童も見られるようになるなど、日常的に読む・書く活動へとつながるきっかけとなった。

このように、読む・書く活動を通して、児童と教師のつながりが深まったり、学級の仲間作りへとつながったりしている。

(5) 成果と課題

a 成果

- ① 本学年の児童は、低学年で、順序を考えながら話す活動を繰り返し行ってきた。また、場に合った声の大きさを話して練習も行って来た。聞くことについては、大切なことを落とさずに最後まで聞く活動を取り入れて来た。このような低学年での積み重ねによって、本時では、筋道を立てて話したり、話の中心に気を付けて話を聞き、わからないところは質問をしたりするといった中学年の目標に迫っていくことができた。
- ② 本単元に入るまでに、いろいろな詩の鑑賞や様々な方法での詩の音読、テーマに沿って詩を作るなどの活動を行った。2学期になってアンケートをとったところ、約8割の児童が詩の学習を好きで「また学習したい」と答えた。そこで、「詩の学習が好き」という児童の実態を考え、話し合いの題材として選んだ。
本時では、一人一人がそれぞれの意見を持ち寄りながら、いきいきと話し合いを進めることができていた。大勢の前で発表するのが苦手な児童も、進んで話し合いに参加できた。
- ③ 学級活動などで自由な形式で話し合わせると、おしゃべりが好きな子やリーダー格の児童が中心となって話を進め、おとなしい子は自分の意見があってもなかなか言い出せない雰囲気があった。そのため、2学期からは、司会をたて、司会者の進行にしたがって話し合いを進める練習を行った。司会者は、各グループで決めさせた。その際、司会者の役割を「話し合い

の進め方」のプリントを読みながら確認させた。話し合いの中心となるリーダーを育成したことで、どの子も安心して自分の意見を言えたり、目的に沿った話し合いが行えていた。やはり、指導者が児童の人間関係や学級の雰囲気適切に把握しておくことが大切であると考える。

b 課題

- ① 本時では、小グループでの話し合いから学級全体での話し合いという形態で学習活動を行った。すると、全体の話し合いの中で「この部分をこうすればもっとよくなると思う。」という次の話し合いのテーマとなるような意見が出てきた。今回は時間の都合で実施できなかったが、全体の話し合いで出た意見をもう一度小グループに返して話し合わせるなど、実態に応じて話し合いの形態を適切に考えていく必要があると感じた。
- ② 本時のふり返し活動の質問項目を「進んで話し合いに参加しようと思いましたか。」としていた。しかし、この質問は漠然としていて、『がんばったこと』をどう書けばよいのか戸惑う児童がいた。本時のはじめに話し合いで大切な3つの内容を確認させていたので、この3つを中心にふり返し活動ができるように、ふり返しカードの質問項目を具体的にしていくことが今後の課題である。(図8)

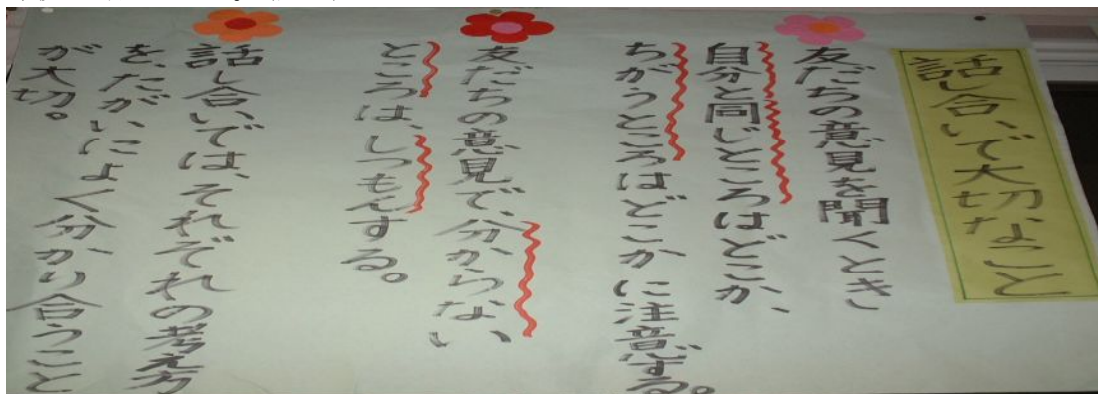
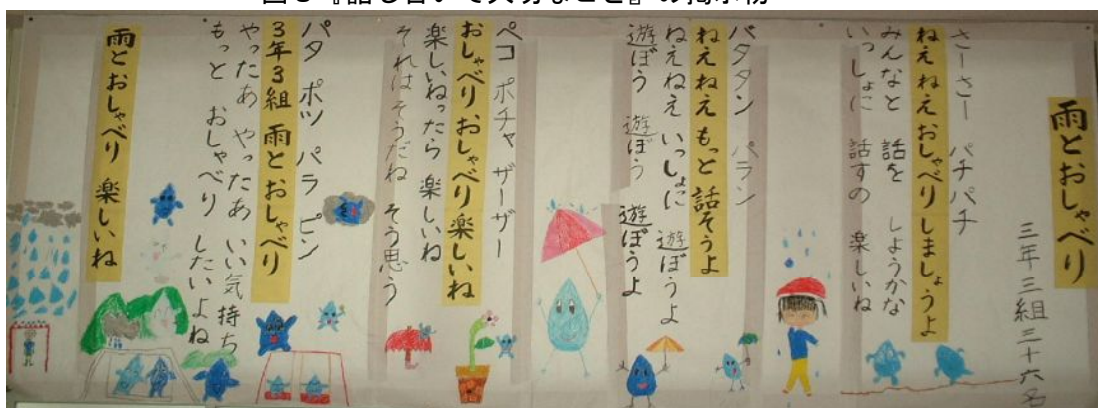


図8 『話し合いで大切なこと』の掲示物



完成した詩

小学校低学年における基礎・基本の確実な定着を図る指導（小学校低学年：算数）

【事例1】 第1学年 「かたち」

天理市立井戸堂小学校 教諭 荒木 由記子
Araki Yukiko

(1) 単元について

私たちの身の回りには立体がたくさんある。図形の概念を得るためには、ものの形の特徴をつかむことから始めることができる。その方法としては、『手で触ってみる』、『動かしてみる』、『いろいろな方向から眺めてみる』などの活動が考えられる。本単元は日常の生活や遊びの中での経験を生かしながら、図形や空間の概念を形成していく第一歩として位置付けられている。ここでは既習の知識を整理するとともに、図形や空間についての理解の基礎となる経験を豊かにしていくことが大切である。そして、第2学年での「三角形・四角形」、第3学年での「長方形と正方形」、「はこの形」へと発展していく。

本単元では、まず、生活の中からさまざまな立体図形を見つけ出すことによって、興味や関心をもたせ、実際に見つけた立体図形を操作することによって、図形に関する理解を深めさせる。また、OHPを効果的に使うなど教具にも工夫をし、算数の苦手な子どもも図形の不思議さに触れることで関心をもたせ、意欲的に学習に取り組ませたい。さらに、理解の早い子どもにも、身近な算数セットを使って、子どもの活動を重視することで驚きをもたせ、意欲・関心を持続させたい。

(2) 単元の目標

- ・身の回りにある立体的な図形の特徴や機能を生かして、形を構成しようとする。
- ・形の特徴をつかみ、なかま分けすることができる。
- ・粘土で立体図形を組み合わせて、いろいろなものをつくろうとする。
- ・立体の面を写して平面図形をつくろうとする。

(3) 指導と評価の計画

ア 評価規準

- ・身近なものを使って立体物をつくろうとしている。（関心・意欲・態度）
- ・立体物をつくるときに、立体図形の機能や形状を生かして考えている。（数学的な考え方）
- ・身近にある具体物（箱や筒）を用いて、立体を構成することができる。（表現・処理）
- ・立体の構成や観察を通して、ものの形を認めたり、形の特徴をとらえたりする感覚が豊かになっている。（知識・理解）

算数への関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての表現・処理	数量や図形についての知識・理解
①立体図形を形状に着目して、なかま分けをしようとしている。 ②身近な立体図形で立体物をつくろうとし	①粘土で立体図形を作ることを通して、面などに着目して、立体図形の特徴を考えている。	①大きさや色、素材などを捨象して、形状によるなかま分けができる。 ②身の回りにある立体	①影を見て、それぞれの立体図形の特徴に着目することを通して、図形についての豊かな感覚をもって

ている。		図形の面に着目して、まる、しかくなどの形を認めることができる。	いる。
------	--	---------------------------------	-----

イ 指導と評価の計画（全4時間）

時	学習内容	関	数	表	知
1	箱など、身の回りの具体物（立体図形）を分類する。	①		①	
2	粘土を使った形づくり	②	①		
3	立体の面を写して平面図形をつくる。（本時）			②	①
4	身の回りにおける立体図形の特徴や機能を生かして、形を構成する。	②			

(4) 展開例



ア 題材

「かたち」（3時間目）

イ 目標

- ・影を見て立体図形を考えることができる。
- ・立体の面を写して平面図形をつくろうとする。


ウ 展開


学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法など
<p>1. 好きな立体を選んで、1つの面を写し取る。</p> <p>○隣の人と協力をして画用紙にその形を写してください。</p>	<p>・2人組になって、協力し合って1つの面を画用紙に写し取るよう、声掛けし、多少、線がゆがんでいても、丸、三角、四角が分かればよいことを知らせる。</p> 	
<p>2. 友達の写し取った形を見て、どこの面を写したのかを発表する。</p> <p>○友達は、この箱のどこの形を写したのでしょうか。</p>	<p>・自分が写し取った図形を基に、考えるよう促す。</p> 	
<p>3. 立体図形の影を見て、ど</p>	<p>・OHPを使ってスクリーンに立体の影を</p>	

の立体図形の影かを発表する。

映す。

- ・まず、鉛筆の影を映し出し、興味をもたせるとともに、影がどのように映るのかを確認する。

(1)  のように影を映す。

(2)  のように影を映す。

※算数セット「かたち」にある立体図形、5種類を次のような順番で影を提示する。(正面・上方・側方から光を当てる。)

- ①三角柱 ②球 ③円柱 ④直方体 ⑤立方体

それぞれの影の形を(1)、(2)、(3)の順に映していく。



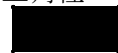
算数セット「かたち」

○スクリーンに映った影は、どの形の影でしょう。

- ・どの立体図形の影かを算数セット「かたち」の立体図形を出し、考えやすいようにする。

- ・影を提示し、子どもたちに推測をさせ、この立体図形だと思うものを算数セットから選ばせる。

①三角柱



(1)



(2)



(3)

- ・(1)の影を見せる。
直方体や立方体だと考える。
- ・(2)の影を見せる。
- ・(3)の影を見せる。
三角柱だと分かる。

※同様に、それぞれの立体図形の影を見せる。

② 球



表—②

(観察・発言)

- ・スクリーンを見て、立体図形を選ぶことができる。

<p>4. 最初に選んだ立体図形の他の面を写し取る。</p>	<div style="text-align: center;"> <p>(1) (2) (3)</p>  </div> <p>③円柱</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  (1) </div> <div style="text-align: center;">  (2) </div> </div> <p>④直方体</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  (1) </div> <div style="text-align: center;">  (2) </div> <div style="text-align: center;">  (3) </div> </div> <p>⑤立方体</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  (1) </div> <div style="text-align: center;">  (2) </div> <div style="text-align: center;">  (3) </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に写し取った面と違う面を画用紙に正しく写させる。 ・立体図形には、いろいろな形の面があることや、同じ形の面があることに気付かせる。 	<p>知—① (発言・ワークシート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立体図形はいろいろな形の図形で構成されていることに気付く。
	<p>エ 指導のポイント</p> <p>☆「もの」を用いる活動</p> <p>低学年の子どもにとって、耳からの情報だけで内容を理解することは難しく、具体物・半具体物を使うことは理解を助ける上でとても大切だと考えた。そのため、本単元だけでなく、どの単元においても、できる限り実際に具体物を使うようにした。</p> <p>今回の「かたち」の授業では、実際に自分で身の回りにあるたくさんの箱や筒などを集め、グループでなかま分けを行った。自分で集めてきた立体図形を、さまざまな角度から見たり、立体図形の特徴を生かしてロボットや乗り物を作ったりする活動をした。それらの活動を友達と相談しながら進めることで、意欲的に取り組むことができた。それと同時に、立体図形の特</p>	

徴を直観的につかむことができたと考える。

また、他の単元でも、具体物を見せることが難しい場合には、教科書の挿絵などを利用し、プロジェクターで映すなどの工夫をした。教科書は全員が持っているが、やはり、低学年の子どもに、「〇〇ページの上の絵を見ましょう。」と指示をしても、なかなか教師が言っている挿絵が分からず、「どこ?」、「先生、これでいいの?」と全員が見るのに時間がかかる。その点、プロジェクターで、挿絵を提示することによって、一斉に全員の子どもたちが同じものを見ることができ



図1 「もの」を用いる活動

るので時間を短縮することができた。また、小さいころからテレビに慣れ親しんでいる子どもは、本の挿絵を見るよりも、プロジェクターで映し出した画面を見るほうがより興味を示すように思われる。しかし、そればかりになってしまっても飽きて効果が薄くなるので、利用する回数や方法にも工夫が必要であると考え。

☆OHP

学習指導要領の学年目標に「具体物を用いた活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を重ね、図形についての感覚を豊かにする。」とある。今回のようにOHPを利用し、立体図形を影で映すことで、どの子どもにも興味や驚きをもたせることができた(図2)。また、立体図形から平面図形を写し取るよりも、平面図形である影から、立体図形を推測させることにより、立体図形をいろいろな角度から見ると、様々な平面図形に見えるという面白さも味わわせることができた。子どもは、映し出される影を見て、どの立体図形なのか、自分の算数セットの「かたち」を手にとって、いろいろな方向から眺めながら一生懸命考えていた。



図2 裏が白のスクリーン



図3 OHPの工夫

子どもたちが『不思議』、『面白い』と感ずることで、更に図形に興味をもち、豊かな感覚を身に付けさせる一歩になると思う。図形だけでなく、数と計算、量と測定などの各領域においても、『不思議』、『面白い』と感ずることのできる授業を展開できればと思う。

(5) 基礎・基本の確実な定着を図るための取組

★プレゼンテーションソフト (Power Point) の利用

低学年の子どもにとって、プロジェクターなどを使い、視覚的に訴えることは、興味をもち、意欲的に取り組む動機付けになる。「ふえるといくつ」、「のこりはいくつ」など、1年生にとって、最も重要な単元の一つであるこれらの単元を、プレゼンテーションソフトを利用して行った(図4)。

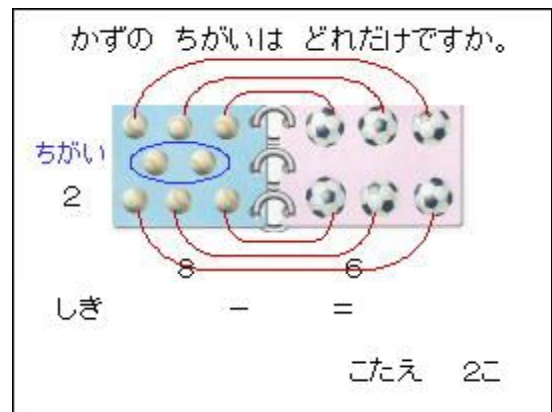
利 点	<ul style="list-style-type: none"> ・「教科書〇〇ページの絵を見ましょう。」と指示するよりも、全員が同じものを見ることができる。 ・興味をもって見ることができ、意欲や集中力を持続させることができる。また、視覚的に訴えることができるため、導入には効果的である。 ・言葉での説明に合わせて絵を動かせるので、理解しやすい。 ・1度作ると何度でも利用できるのもので、やりたいときに戻って学習することができる。
欠 点	<ul style="list-style-type: none"> ・画面が次々に流れていくため、終わったところが黒板や画面に残らない。そのため、すぐに見直すことができない。 ・進めていく速さが速すぎると、理解に時間のかかる子どもには、いっそう分からないものになってしまう。 ・1時間分の教材を作成するのにかなりの時間を費やし、毎時間分を作ることは大変である。

以上のような利点・欠点が考えられるが、今回、「ちがいはいくつ」の単元でもこのソフトを利用し、授業を行った。以前に担任をした1年生では、「ちがいはいくつ」の単元を、言葉での説明と同時に、ブロックなどの半具体物を使いながら、なぜ引き算を使うと違いが求められるのかを説明したが、なかなか理解できない子どもがいた。

しかし、今回は、耳から説明を聞くと同時に、目からもパワーポイントの絵が動いて情報が入ることによって、違いを求めるときには引き算を使えばいいということが、簡単に理解できたようである。



図4 プレゼンテーションソフトの利用



★朝の活動“井小タイム”の活用

毎週火曜日、業前に“井小タイム”という朝の学習時間が20分間ある。この時間を利用し、「いくつといくつ」や「たしざん」、「ひきざん」など基礎学力の定着を図っている。

ワークシートは、子どものやる気を損なわないよう、1枚には問題の数を5～10問程度にし、10～20枚ほど用意をするようにした(図5)。そうすることで、計算が速い子どもは次々と進められ、遅い子どもも1枚は必ずできるので、できたという達成感が得られる。また、問題数が少ないので、もし、時間内に終わらなくても、残りを少しの時間で仕上げるができるためそれほど苦にならないようである。これを繰り返すうちに、少しずつ時間内にできる枚数が増えていき、子ども自身が「今日は、前よりも早くできるようになった。」と実感でき、

「今度は〇枚できるようにがんばろう。」と意欲的に取り組むことができた。

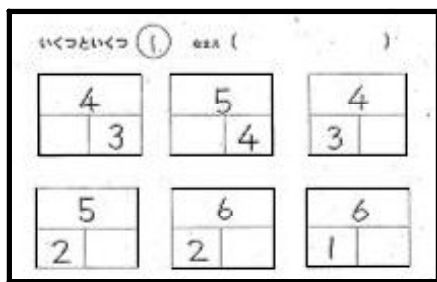
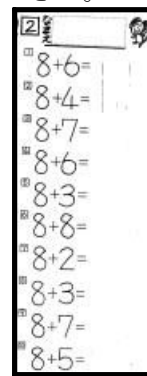
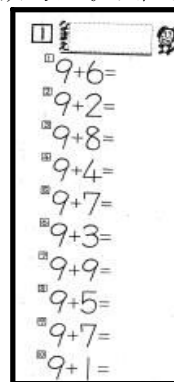


図5 ワークシートの例



★計算カード

たしざん・ひきざんを学習した後、毎日、計算カードの読み上げを家の方に聞いてもらう宿題を出した。毎日、聞いてもらうことで、指を使わずに計算ができるようになってほしいと思った。本学級の子どもの母親は子どもが帰宅する時間帯にほとんど家にいるので、毎日、きちんと聞いてもらえる状況にあった。また、2名の子どもの学童保育に通っているが、学童保育の指導者がきちんと聞いてくださっていたので、その子どもも、毎日、計算カードの練習をすることができた。

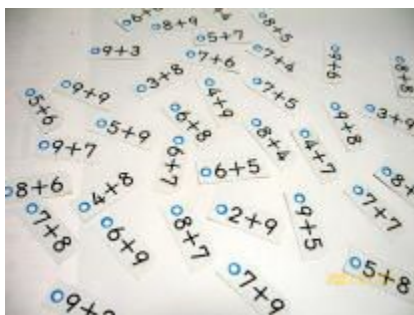
しかし、保護者からは、「毎日、計算カードを聞くのは大変である。」という意見も多かった。また、計算カードの読み上げを聞くときは、夕食の準備をしながらや、何か家事をしながらのことが多く、「気がつくともどもは、計算カードの裏の答えを見ながら言っていることもあります。」ということもあった。

そこで、2学期からは、計算カードではなく、算数プリントの宿題に変更した。保護者からは、「プリントの方が、子どもの力だけであることができ、でき上がってから見直しをしたりできるのでこちらの方がよい。」という声が多かった。

そこで計算カードは、単に計算練習をするだけでなく、授業において次のようなゲームで使うようにした。すると、休み時間でも教員が指示をしなくても自発的に友達と一緒に楽しみながら、飽きずに何度も遊ぶ姿が見られた。結果、単に計算力が付いただけでなく、数の構成を考えたり、計算の仕方に工夫をしたりする子どもも出てきた。

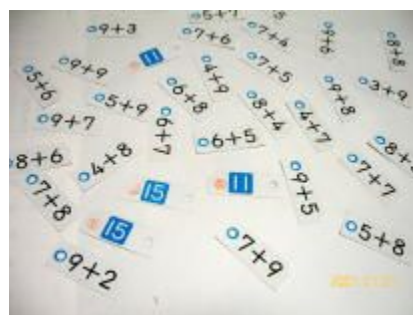
(1) 『神経衰弱』の要領で、同じ答えになるカードを2枚取ると自分のものになるゲーム。

①並べられたカードの中から、暗算で答えが同じになるカードを探す。



②選んだカードを裏返し、答えを確認。

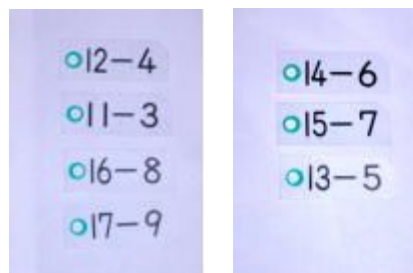
正解だと、もう一度続けてカードをひく。



(2) 教員が言った答えのカードを取り合ってどちらが多く取れるかを競うゲーム。

① 答えが同じ数になるカードを同時に、探し出し、見つけたらそれを取っていく。

② 制限時間内にどちらが多く取れるかを競う。枚数の多い方が勝ち。



Aさん

Bさん

「答えが8になるカード」

Aさん4枚、Bさん3枚で、Aさんの勝ち。

(6) 今後の展望

低学年における基礎・基本の確実な定着を図るために、子どもへの「見せ方」を工夫しながら授業を進めてきた。日常生活にある具体物を使って説明することは、低学年の子どもにとってイメージがしやすく、理解を促すためにはとても大切だと改めて感じた。

今後、算数科において具体的なものから抽象的なもの（言葉や数字など）へとスムーズに移行するためにも、プロジェクターやOHPなど様々な教具を使うことで、少しでも子どもの理解に役立てばと思う。しかし、これらの教具を使うには、教材研究や教材開発に時間がかかる。その時間をいかに確保するかが今後の課題である。

また、同じ方法ばかりでは、子どもも飽きてしまい、興味・関心を示さなくなってしまう。子どもの発達や単元の特性に応じて、様々な工夫をすることで、絶えず子どもの興味・関心を引き、驚きや面白さを感じ取れるような教材・教具を研究していきたい。

【事例2】 第2学年「かけ算（2）」

御所市立葛小学校 教諭 井上正子

I noue Mashako

(1) 単元について

本単元では、6、7、8、9、1の段の九九を構成することと、九九表を用いて九九について成り立つさまの理解を深め、最終的に九九を総合的に適用する問題解決をすることで、九九の理解を深めていく。かけ算（1）の学習で、子どもは九九を構成する際に乗数が1増えると積は被乗数だけ増えるという性質を学習した。また、かけ算の意味理解を深めるためにブロックやおはじき、絵カードなどの具体物を使った。

しかし、6の段以上になると数の概念が大きくなり、数をイメージしにくくなったり、九九を唱えるときに「四」や「七」などの言い方で混乱したりする。

ここでは、九九の適用、特に九九を使った問題作りに重点を置いて指導した。1年生や本単元に入る前にもたし算やひき算の問題作りの課題があった。子どもは普段いろいろな問題文を読みながら問題を解いていくが、逆に自分が問題文を作るとなると、言葉がねじれたりキーワードになる言葉が不足したりして難しい。そこで、問題作りに慣れ、キーワードになる言葉を活用できるようにした。

問題作りは九九の構成を理解してそれを活用するという点において重要な学習である。問題を作るには、かけ算の意味理解が不十分だとできない。よって、「1つ分の大きさ」、「いくつ分」、「全体の大きさ」を関連付けて考えていることや倍の意味を理解していることが大変重要である。これらをしっかり理解できるように指導したい。

問題作りは個人差がかなり大きく、生活経験や言語活動の差も影響していると考えられる。しかし、自分の興味のあることについて何を取り上げてよいという自由な楽しさがある。かけ算のイメージが沸きにくく、どんな問題にしようかと悩む子どもには絵カードや具体物を提示したり実際に物に触れてみたりすることも手だてになると考える。「どんな問題を作ろうかな」と子どもがわくわくするような言葉かけやヒントカードの活用で楽しく取り組めるようにしたい。

(2) 単元の目標

- ・倍の意味を理解し、何倍の大きさを式で表すことができる。
- ・かけ算に関して成り立つ性質（かける数が1増えると、答えはかけられる数だけ増える）を理解し、それをもとに6、7、8、9、1の段の九九の構成をしようとする。
- ・6、7、8、9、1の段の九九を知り、正しく唱えることができる。
- ・九九の有用性を知り、これを活用することができる。

(3) 指導と評価の計画

ア 評価規準

- ・九九のよさを認めて、覚えたり、用いたりしようとしている。（関心・意欲・態度）
- ・かけ算の用いられる場面を考えたり、かける数が1増えると、答えはかけられる数だけ増えるというかけ算の性質を使ったりして、計算の仕方を考えている。（数学的な考え方）
- ・九九（6、7、8、9、1の段）を式で表すことができる。（表現・処理）
- ・かけ算の意味や性質、計算の仕方を理解している。（知識・理解）

算数への 関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての 表現・処理	数量や図形についての 知識・理解
------------------	---------	---------------------	---------------------

①乗法のおよさがわかり、九九を覚え、活用しようとしている。 ②九九を使ったゲームを理解し、取り組もうとしている。 ③身の回りのものから九九が使えることを見付けようとしている。	①乗数が1増えるごとに積は被乗数だけ増えるという性質を用いて、九九の構成を考えている。 ②既習の九九をもとに7の段の九九の構成を考えている。 ③既習の九九をもとに8の段の九九の構成を考えている。 ④既習の九九をもとに9の段の九九の構成を考えている。	①6の段の九九を正しく唱えることができる。 ②7の段の九九を正しく唱えることができる。 ③8の段の九九を正しく唱えることができる。 ④9の段の九九を正しく唱えることができる。 ⑤1の段の九九を正しく唱えることができる。	①倍の意味を理解している。 ②6の段の九九の構成を理解している。 ③7の段の九九の構成を理解している。 ④8の段の九九の構成を理解している。 ⑤9の段の九九の構成を理解している。 ⑥1の段の九九の構成を理解している。
---	---	---	---

イ 指導と評価の計画（全20時間）

次程	時間	学 習 内 容	関	数	表	知
1	1	倍の意味				①
2	2	6の段の九九の構成		①		②
	3	6の段の九九の唱え方			①	②
	4	6の段の九九の適用（本時）	①			
3	5	7の段の九九の構成		②		③
	6	7の段の九九の唱え方			②	③
	7	7の段の九九の適用	①			
4	8	8の段の九九の構成		③		④
	9	8の段の九九の唱え方			③	④
	10	8の段の九九の適用	①			
5	11	9の段の九九の構成		④		⑤
	12	9の段の九九の唱え方			④	⑤
	13	9の段の九九の適用	①			
6	14	1の段の九九の構成、唱え方			⑤	⑥
	15	1の段の九九の適用	①			⑥
7	16	九九のいろいろなゲーム(1)	②			
	17	九九のいろいろなゲーム(2)	②			
8	18	身の回りの物からかけ算九九で表せるものを探す。	③			
	19	見つけた問題を解き合う。			①～⑤	
9	20	学習のまとめ				①～⑥

(4) 展開例

ア 題材

かけ算（2）（4時間目）

イ 目標

- ・ 6の段の構成を理解し、6の段の九九を使う問題を作る。

ウ 展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1. かけ算のフラッシュカードを見て答えを言う。 2. 6の段の歌を歌う。 3. 6の段の九九を聞き、手拍子と指で答えを表す。	<ul style="list-style-type: none"> ・ テンポよくリズムカルにめくり、集中力を高める。 ・ 楽しい雰囲気を作りながら、6の段の九九を思い出させる。 ・ 間違えても次はがんばろうという意欲をもたせる。 	
6のだんの 九九をつかう もんだいを 作りましょう。		
4. 問題作りの例題を見て作り方を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指人形を使って興味をもたせる。 犬「あめを1ふくろに6こずつ入れます。3ふくろでは、なんこになりますか。」 猫「6cmのリボンを8本作ると、リボンはなんcmいりますか。」 ・ 飴を6個ずつ袋に入れる場面を見せて、問題作りをイメージしやすくする。 ・ 例の問題の式を書いたり、ブロックを並べたりして、6の段の問題になっていることを確かめる。 ・ 例文がそのままヒントカードになることを示す。 <div data-bbox="641 1473 1091 1809" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>()が1さらに()ずつ ()あります。()はぜんぶで なん()ありますか。</p> <p>()が1つのばく場に()ずつ います。ばく場は()あります。 ()はぜんぶでなん()いますか。</p> <p>()を1人に()ずつ ()にくぼります。()は なん()いるでしょう。</p> </div> <p style="text-align: center;">ヒントカード</p>	
5. 6の段の九九を使う問題を考え、学習シートに書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個に応じた言葉がけをする。絵カード、問題作りノート（自分が以前書いたプリント集）などをヒントに考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意欲的に問題を作ろうとしている。（学習シート・観

<p>6. 作った問題を一人一人発表する。</p>	<div data-bbox="639 185 1096 526" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="826 555 927 584">絵カード</p> <ul data-bbox="611 674 1134 972" style="list-style-type: none"> ・書きたいことは分かっているが、文章に表しにくい場合は、キーワードがあるヒントカードを提示する。 ・間違っている場合は具体的に説明しながら考えを正す。 ・文章に表されたことをイメージして聞くようにさせる。 	<p data-bbox="1174 185 1214 215">察)</p> <ul data-bbox="1158 230 1406 394" style="list-style-type: none"> ・6の段の構成を理解し、正しく問題を作っている。(学習シート)
---------------------------	--	---

エ 指導のポイント

☆フラッシュカード

授業の導入に取り入れた。リズムカルにテンポよく九九を唱えることで集中力が増す。全員で同時に九九を唱えた後、一人ずつ交代で唱えた。他の段でも継続して行うことで、学習パターンをつかむことができる。

☆九九の歌

低学年の子どもは歌が大好きである。学習の中でも楽しく歌いながら九九を覚えることができたらいと考え、九九の歌を作った(図6)。1年生のときに生活科の劇で歌った「ドキドキドン! 一年生」の替え歌で、本学級の子どもにとっては大変馴染みの深い曲である。2の段から継続して歌った。

体を左右に揺らしながら楽しそうに歌う子どももいる。

これからはじまる2のどん
 みんなでおぼえよう
 二一が2 二二が4 二三が6ですよ
 二四が8 二五10 二五10
 二六12 二七14
 二八16 二九18
 おぼえたよ パーフェクト

図6 九九の歌

☆九九でパンパン

ゲーム的な活動を取り入れ、楽しみながら九九を覚える。九九の問題を聞き、答えを手拍子と指で表す。答えの十の位は手拍子で、一の位は指で数を表す。例えば、6の段では、「六四?」と聞かれると答えの十の位は2だから2回手拍子でパンパンとたたく。その後すぐに一の位の4を指で表す。はじめはゆっくり、だんだん速くしていくと子どもたちはたいへん集中し、楽しんで活動する。

☆指人形の登場

本時では、問題作りの例題を見せる場面で犬と猫の指人形を使った(図7)。低学年の子どもは大変お話し好きで、架空の物語を目を輝かせて聞いたり、自分でお話を作って話したりする。そこで、子どもが興味をもち、集中して例題を見るために、二体の指人形を使い、会話をしているようにした。「今日はゲストを呼んでいます。」と言って、指人形を出すと、子どもたちは体を前に傾け、きらきらした目で指人形を見つめた。



図7 指人形

そして、犬と猫がそれぞれ問題文を作った。犬バージョンでは、飴を袋に6個ずつ入れ、それを黒板にはった。猫バージョンでは、今までの問題作りにはなかった「一文」の問題を例示した。この後、子どもが自分で問題を作るが、さっそくこの例題を参考に問題を作っている子どももいた。

また、指人形の印象が強く、6の段以降の7、8、9の段でも犬バージョン、猫バージョンの問題をよく覚え、参考にして問題作りをした子どももいた。

☆ゾロリカード

怪傑ゾロリの怪傑と、問題解決の解決をかけて、ヒントカードの名前を「ゾロリカード」と称した。本時では、それまでに出てきた問題作りのヒントになる文章を3つゾロリカードとして黒板にはった。また、問題を作る場面では机間指導をしながら、問題を作りにくい子どもに絵カードを見せた。いくつかの絵が混在する絵よりも一つのことを表した絵の方が子どもにとっては分かりやすいので、絵カードを何枚か用意した。

(5) 基礎・基本の確実な定着を図るための取組

★問題作りノート

2の段から始まって3から9の段で九九を使った問題を作った。プリント綴りに綴っていくのではなく、それらのプリントをはり合わせてノートのようにした。子どもたちは、継続して問題を作っていくことで、問題作りへの意欲が高まり、作り方をマスターしていった。

★あつまれあつまれ〇〇のなかま

身の回りの物からかけ算を見付けたり、問題作りの対象を見付けたりする目を養うために、すべての段において、その段の同数ずつの集まりの物をみんなで見付け、絵に表し、画用紙に貼っていった。そうすることで、物や場面を算数的にとらえる力が付くと考えた。子どもたちが見付けた物には次のような物がある。

2の段・・・手袋、靴、靴下、おはし、鳥の羽、ランドセルの肩ひも、肺、教室の蛍光灯、眼鏡のレンズ

3の段・・・三輪車のタイヤ、クローバーの葉、信号の色、フランスの旗の色、だんご3兄弟

4の段・・・車のタイヤ、野球のベース、四つ葉のクローバーの葉、机のかど、折り紙で折った手裏剣の刃



図8 あつまれあつまれ2のなかま

5の段・・・5枚切り食パン、グローブの指、平日の日数

6の段・・・バレーボールチームの人数、6枚切り食パン、6個入りの卵、昆虫の足、
ドラえもののひげ

7の段・・・ナナホシテントウの点、虹の色、一週間の日数

8の段・・・惑星の数、クモの足、タコの足、八角形のかど

9の段・・・野球チームの人数

みんなで見付けた同数ずつの集まりを書いたプリントも問題作りノートに貼った。身の回りの物をかけ算の目で見ることができた。家で進んで見付けてきて、報告する子どももいた。

★興味をもたせる工夫

先に述べたように、低学年の子どもは大変お話好きである。時計の学習では、指導用の大きな時計二つに「時計ちゃん」、「ミニッツ」という名前を付けた。それだけで、子どもの興味は大変強まった。給食を食べながら、子どもが私に聞いてくる。「時計ちゃん、今何してるの?」、「ご飯食べて休んでるの。」、「時計ちゃんて何食べてるの?」、「時間食べてるの。」子どもから笑みがこぼれる。また、ある子どもは久しぶりに時計のおさらいテストをしたとき「あっ、ミニッツや!」と喜んでいた。

教具に名前を付ける、それだけで低学年の子どもは興味を示し、親しみ深くなる。

★学校全体での取組

今年度、職員が「たし算」部、「ひき算」部、「かけ算」部、「わり算」部に分かれて研修を行った。そして、計算領域の指導システム化計画として、各学年でシステム化することを冊子にまとめた。各学年で必ず実施するシステムも考えた。

<低学年>

1年・・・加：①基本たし算の計算カードを使用し、暗記させる。

②合成のフラッシュカードを作成し使用する。

③合格カードを使用する。

減：①基本ひき算の計算カードを使用し、暗記させる。

②分解のフラッシュカードを作成し使用する。

③合格カードを使用する。

2年・・・乗：①九九カードを必ず購入し暗記させる。

②九九フラッシュカードを作成し使用する。

③合格カードを使用する。

④九九練習宿題カードを使用する。

⑤修行の滝を実施する。(給食後などに担任が九九を聞く。)

また、筆算の書き方や筆算での繰り上がりや繰り下がりの数字のメモの書き方を全学年で統一するようにした。

「葛小の計算」として、各学年で毎年決まった問題を解く。そして、個人の習熟度を「葛小の計算」カルテに記録していく。それによって、担当している学年だけでなく、以前の学年でのつまづきを知り、段差をなくしていくための指導法を考えるようにする。

(6) 今後の展望

問題作りに重点的に取り組むことで、子どもに分かる喜びが芽生えた。2の段から問題作りを始めて、初めは作った問題文の筋が通っていなかった子どもが5の段で例題のヒントカードを見て問題の作り方が分かり、その日の休み時間にも意欲満々、一人で問題を作っていた。また、宿

題ではなくても家で進んでかけ算の問題をノートに書いてくる子どもがいた。算数に苦手意識をもっている子どもが、問題作りに慣れた頃、「もう問題の作り方分かった！」と得意そうに話していた。ある子どもは動物が好きで、動物の問題をたくさん作っていた。

また、問題作りには具体物を見せたり、操作したりすることも大事であるが、パターンとなる問題の見本を多く例示することが効果的であるということが分かった。子どもたちは自分が作りたい問題をパターンの中から選んでまねることで作り方を理解していった。また、一つのパターンをずっと覚えていて、物を変えて繰り返し使う子どももいた。

「~ずつ」、「ぜんぶで」というキーワードが大事であることも理解していた。しかし、学習した問題のパターンに慣れてしまい、グループで校内のかけ算探しをしたときは、その状況を文章に表すことが困難であった。

基礎・基本の力を定着させるために、低学年では特に具体物を操作すること、継続して繰り返し行うことが大切であると考え。本単元で各段ごとに問題作りをした結果、続けることで身に付くということを実感した。

また、算数の学習は系統的なものであるため、低学年の段階で個人のつまずきを把握し、個別に指導したり、個に合った学習シートを工夫したりすることも大事であると考え。

教員がストーリーを作って子どもを話の世界に引き込み、興味をもたせることも低学年では効果的であると考え。

今後も学習したことが生活の中で生かされるような場面を大切に、算数のよさを感じたり、学習したことを活用することのすばらしさが分かたりするような指導を心がけたい。学級の子どもの実態や発達段階の特徴をとらえ、子どもが興味をもって取り組み、分かる学習指導の工夫をしていきたい。